

小札鋳留衝角付冑の変遷と その意義

Transitions in *Kozane Byōdome Shōkaku-tsuki* Helmets
and Their Significance

鈴木一有

SUZUKI Kazunao

はじめに

- ①小札鋳留衝角付冑の変遷
- ②衝角部の諸特徴
- ③共伴遺物からの検証
- ④マロ塚古墳例の編年的位置づけ
- ⑤結語

[論文要旨]

マロ塚古墳から出土した小札鋳留衝角付冑の製作時期を探るため、小札鋳留衝角付冑を衝角底板の連結手法と伏板先端の処理技法によって型式設定し、諸属性の分析によって各型式の製作段階を検証した。革綴衝角付冑との連続性を考慮して、小札鋳留衝角付冑を、Ⅲ式、Ⅳa式、Ⅴa式、Ⅴb式の合計4型式に分離した。さらに、①鋳頭形状、②地板枚数、③縦矧板使用の有無、④後頭部幅広小札使用の有無、⑤鋳構成枚数、⑥袖綴もしくは最下段鋳後頭部決りの有無、⑦鋳前端覆輪の有無、といった項目ごとに諸属性を比較した。これらの分析作業に、古墳の共伴遺物の検討を加え、小札鋳留衝角付冑の製作段階を、三つの段階に分けて理解した。第1段階はⅢ式の古相段階、第2段階はⅢ式の新相段階、第3段階は、Ⅲ式の最新相に加え、Ⅳa式、Ⅴa式、Ⅴb式の各型式がそろう段階である。このうち、マロ塚古墳から出土した小札鋳留衝角付冑は、第2段階から第3段階への移行期にあたと捉えられ、中期中葉から後葉（5世紀中葉から後葉）の所産と推定した。

小札鋳留衝角付冑の製作段階は、5世紀の前葉から後葉までの時間幅の中で推移している。小札鋳留衝角付冑の分析を通じて、鉄製甲冑における鋳留技法の導入から定着までの変遷過程が明確に整理できた。小札鋳留衝角付冑の型式変遷には、革綴冑の製作技法や形態を引き継ぎつつ、鋳留冑として製作しやすい技法や形態へ変化する様相がうかがえる。形態変化の背後には、眉庇付冑の製作技法との関連も散見でき、今回取り上げた属性分析や、共伴遺物による検証は、横矧板鋳留衝角付冑の検討にも応用できる。本稿の整理により、眉庇付冑や横矧板鋳留衝角付冑の変遷を視野に入れつつ、鋳留技法を用いる冑の変遷を総合的に検討することが可能になった。

【キーワード】マロ塚古墳、衝角付冑、属性分析、鋳留技法、5世紀